

丹羽文雄文学全集 第三卷
厭がらせの年齢 有情



丹羽文雄文学全集 第三卷

厭がらせの年齢・有情

一九七四年九月八日 第一刷発行

著者 丹羽文雄

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽二丁目二二番地 郵便番号 一三二
電話 東京〇三九四五一二二（大代表）・振替 東京三九三〇

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 株式会社小島製本所

定価は箱に表示してあります

落丁本・乱丁本はお取り替えます

©丹羽文雄 一九七四年 Printed in Japan

(文1)

目次

有 情	7
厭がらせの年齢	77
幸 福	107
母の日	127
母の晩年	153
うなずく	163
もとの顔	171
九年目の土	181

型置更紗	201
肉親賦	223
寝椅子の上で	249
娘	261
熊狩り	271
青 麦	285
創作ノート	401

装幀・辻村益朗

(写真・一九二四年、牛込高田町の下宿にて)

丹羽文雄文学全集 第三卷

厭がらせの年齢・有情

有

情

二階から下りてくる私の心は、重かった。私はこれからある人間に引導をわたそうとするのだ。息の根をとめるにひとしいことをやってのけるのを、周囲が期待をしている。が、私は引導をわたすほどの名僧知識ではない。それだけの知恵もなければ、行も、資格もない。いうならば、私はつねに引導をわたされる側の人間だ。階段のところのことさらスリッパの音をたてた。

三人の女が無言で私を迎えた。いつもならおしゃべりの切れ目のない三人だが、深刻な事情のために、息をひそめているようであった。引導をわたされる義妹の季子の正面に私はすわった。四角な紫檀の卓を、それぞれとりかこむ形になった。私は呼吸をととのえる必要があった。正面の季子は面を伏せている。そのようすは、謙虚に話をきこうと気持をしずめているようでもあり、馬耳東風のしたたかなものを用意しているようにもうけとれた。季子はすこしも怯える必要はないのだ。むしろひるんでいるのは、ほかの二人の女であり、私であった。が、二人の女は季子にとって義姉であり、年齢もはるか上であった。

「今度のことは、一にも仙哉が悪い、二にも仙哉が悪い。仙哉のやったことについては、弁護のしようがない。その点については私たちはみんなあなたに同情をしている。仙哉を責めている。妻以外の女を愛し、しかも、その女に子供までもうけたのだ」

と、私は前置をいった。季子はその事実を最近になって知った。が、私夫婦はずうっと前から仙哉の口からきかされていた。仙哉は、長姉には打ちあけていなかった。次姉である私の妻と仙哉は二つしか年齢がちがわず、五人姉弟のなかでは、何かにつけて私の妻には話がしやすいかたようである。何年前か、私は銀座の並木通りで義弟と偶然ゆきあった。そのとき義弟は女をつれていたが、とおくから私をみかけると、女は反対側の舗道にうつり、仙哉だけが近づいた。はなれていった女を無視して、私はしばらく仙哉と立話をした。義弟に恋人のあることはきいて、いたが、いまは紹介したくないのだろうと、その気持をすなおにみとめてやることにした。が、子供ができると、仙哉は姉弟に秘密にしておくことがつらくなり、たれかに自分らのことがみとめてもらいたくなったのだろう。女の方からいい出したこともかも知れない。日かげもの子を哀れと思うようになった。姉弟のたれかがみとめてくれれば、日かげものということの心の負担が、それだけでも軽くなり、すくわれると考えたからであらう。そういう場合仙哉が心

にうかべるのは、すぐ上の姉である私の妻だった。もちろん私の妻は、弟を責めた。が、すべてはあとの祭であり、やむをえず妥協をした妻のところへ、仙哉が子供をつれてきた。私もその子供をみた。

「あのようにいじらしい、罪もない子供をみてしまつては、もう私には何もいえません。目もとが仙哉そっくりです。神経質そうなところも、仙哉の小さいときにそっくりです。私の小さいときの写真によく似てます。あんなにについている子供をひきはなしたら、どうなりますか」

生まれたときから不幸を背負った幼い子の運命に、私は胸をしめつけられた。日の大きな、繊細な感じの、小さいくせに端麗な顔立が、いつそう哀れであった。年ごろになれば、すぐれた美貌が約束されている。出生の事情がどうあろうと、幼い子の運命には無条件に手をかさねばならぬのだ。妻はあらゆる攻撃の武器をとりあげられたようであった。自分の小さいときの顔に似た幼い子に、妻は負けしまったのだ。その後、二度女の子は私のうちにきた。一度は母親といっしょだった。母親よりも父親を恋しがつてゐるふうだった。いつもいっしょにいられないせいもある。の首にだきついたり、父親の腕の中心で安心しきった女の子をみてみると、おのれの宿命の哀れさがすでにわかつていってしまった。父親を慕うしぐさが異常だった。

「良人が浮気をして、ほかの女に子供をつくった。世間にざらにある事件だ。そういう事件を解決する方法も、またおのずとさまっている。金銭的に解決をつけるか、子供をひきとり、女と手を切らせるか、解決方法はおよそさまっている。しかし、今日あなたにきてもらったのは、そういう解決方法をすすめるつもりではなかった。問題は、女の子の宿命にあなたも手を貸してもらいたいということだ。良人の浮気を責めたり、相手の女を憎悪するのは、あなたとしては当然の感情だが、それを越えた解決方法をあなたに期待したいのだ。私も、その女の子をみた。その子はもう五つになっている」

「もうそんなに大きいのですか。私はせいぜい今年生まれただぐらいに思っていました」と、季子が顔をあげたが、すぐ目を伏せた。

左側の妻の姉の態度にも、おどろきの感じがあった。妻は姉にはくわしいことを話していなかった。

「生まれたばかりの子供だったら、或いは私の考えもまたちがったかも知れない。しかし、その女の子はすでにおのれの宿命を感じている。そのことを問題にしたいのだ。十分あなたと話合いたいのだ。仙哉のことはしばらく措くとして、その女の子の運命を問題にしたい。そういうことがあなたに無理なことはよくわかつている。結論をいおう。あなたにも、その子を哀れと思ってもらいたいのだ。仙哉

がにくければ、その女もにくい。その子供もにくいだろうが、いまあの子を仙哉からひきはなしてしまつたら、どうなるか。死んでしまふだろう。あの女の子は父親だけで生きていたようだ。子供というものは、大てい雑草のようにつよいものだ。その年ごろの子供はいたずらざかりで、親の手にあまるものだ。そういう感じがその女の子にはまったくないのだ。弱々しそうなからだだ。利口そうな目をしている。大人の世界を敏感に感じているのではないか。いかにも扱いにくい子だ。私はこの事件を世間なみに、わりとあっさり解決がつくと思つていた。しかし、その女の子をみるに及んで、これは大へんなことになつた、へたをするときにかえしのつかないことになると思うようになった。仙哉やその女を問題にするのでなく、女の子を中心と考えなければならぬと思うようになった。仙哉は、子煩悩な人間だ。明や望をあんなに可愛がつてゐる。あんなたちは最初の長女を死なせてゐる。仙哉がその女の子を可愛がるのも、死んだ女の子のことがいつも心のどこかにあるからではないかと思われるくらいだ」

「私は、その子をひきとつてもよいと考へてました。でも、そんなに大きくなつてゐると思ひなかつたのです」
「それも一つの方法だ。しかし、あの子は母親の手もとにいて、ときどき父親に会つてゐながら、すでに傷つた小鳥のように、何となくおどおどしている。元氣いっぱい

の明や望といつしよにくらすようになったら、どうなることか」

その子を哀れと思ひ、みとめるとなると、仙哉の不倫を承認することになる。私はそれを季子に強いようとしてゐるのだ。妻の立場を無視し、いい分を抹殺してかかるのだ。にくい女にできた子供が死のうと生きようと、季子のかまつたことではない。死んだところで、自業自得というべきであり、悲しむのは仙哉である。仙哉がすべてをひきうけるのだ。そのため季子が傷つくことはないのである。妻の座をまもるには、無慈悲にもならねばならないのだ。私たち夫婦ははじめから仙哉の味方に立ち、季子に分の悪い扱いをしようとしたくらんでゐた。私たちにはそれが真実だつたからだ。しかし、季子には通じないものである。通じないのを承知で、無理強いをするのだ。季子はだまつた。いよいよ面を伏せて、敵意をしめすようであつた。妻も、妻の姉もしじゅう無言だつた。

「仙哉のやつたことはたしかに悪い。だけど仙哉だけを責めるわけにはいかない。仙哉をそうさせた一部の責任は、妻にもある」そういうのが、長姉の意見であつた。

かつて仙哉が私の妻にぐちつたことがある。

「うちでごろんと横になつてゐると、すぐ風邪をひいてしまふ。が、もうひとつの家で横になつてゐても風邪をひかない。いわれなくとも、毛布かふとんをかけてくれるから

です」

仙哉の妻が仙哉に対してわざと冷淡にふるまうというのではなかった。季子には気がつかないのである。悪気があったのではない。が、仙哉の心が妻から次第にもうひとりの女性にうつっていった隠微な過程が、私に納得できるような気がする。しかし、大いの場合男はそういうものである。あまりしばしば利用された口実なので、その口実が真実であっても、何となく手垢のついた理屈になってしまう。

「仙哉のいい分は、わがままだ。仙哉にはどちらの家庭も解消する心がない。どちらも自分には大切だ。これから大切にしていきたいと主張する。どこの身上相談でも、仙哉のいい分はみとめられないだろう。男のわがままだ。なぐりつけてやりたいぐらいのわがままだ。しかし、それほどのわがままゆえ、私は逆にみとめてやりたいのだ。当然仙哉はそれだけのことをあんたにするだろう。しかし、それではあんたの気がすまないのは当然だ。妻の立場が無視されるのだ。しかし、世間なみに解決をつけるということが、はたしていちばん賢明だろうか。それで一応あんたの立場がまもられたとしよう。そのためあの女の子が死ぬようなことになる。女の子が死ねば、仙哉とその女とのあいだも自然と冷却し、それをきっかけに別れてしまうことになる。そうなれば、あんたの思うつぼだ。しかし、それで

あんたは安堵できるのか。あんたの安心のためには、ひとりの女の子が犠牲となった。仙哉は生涯そのことをわすれないだろう。あんたの性格とすれば、おそらくあんたもそのことをわすれないだろう。何かにつけて仙哉の罪を小突きまわすことになるだろう。罪は仙哉が蒔いたのだといって、仙哉ひとりを責めたてる。形は一応あんたの思うように戻っても、夫婦の心は陰惨となる。そしてあんたたちはその陰惨を生涯ひきずって生きていくことになるのだ」

解決のつけようのないことに、無理に解決を押しつけようとする私。強引さが胸の中でかわいた音をたてていた。はじめから季子を説得できるとは思っていなかった。ただ押しつけるだけである。女の子をみているだけに、たしかに私は感傷的になっていた。私はこの事件を善悪の基準でわりきりたくなかった。そんなものでは解決はつけられない。善悪の判断は一部分の解決にはなるが、その線からはみ出すものの方が多いいのだ。しかし、季子の求めているものは、わかりのよい解決である。蛇のなま殺しのような解決をもとめているのではない。季子のは、世間に通用するものである。私の押しつけるものは、世間にわかつてはもらえない性質のものである。

「お義兄さんのおっしゃることがわからないではありません。でも、よく考えてみたいと思います」

「あなたにお願いしているのだ。結果においては仙哉の浮

気をとめろということになるが、女の子の運命を考えてほしいのだ。無理を承知で、目をつむってくれとたのむのだ。それだけに仙哉にも責任をもってもらう」

うまく引導をわたしたことはならなかった。かえって季子の苦悩を押しひろげたようである。私たち夫婦がこの事件をどうみているかということを知らただけになった。季子がかえっていくと、息ぬきのため私は部屋を出た。あとにのこった妻と長姉との会話がきこえた。

「私は、断じて仙哉の女には会いませんよ。その女の子にも絶対に会いませんよ。会えば、その母親と子を私がみとめたことになりましたからね。仙哉の妻にもいたいことはありますが、そんなことは私がいふべき筋合ではありませんからね」

長姉がこの事件で何の報告もうけていなかったことに気を悪くしているのは、よくわかる。そのためこの事件には触れたくない立場を主張する。見ざる、聞かざる、いわざるで傍観がしたいのだ。そういう立場もある。私の報告がまちがっていたのだろうか。仙哉に女の子が生まれたことを、その女の子を中心に私たちの問題にしようというものがまちがいだろうか。好むと好まざるとにかかわらず、問題としなければならぬのではないか。長姉の立場を私はうらやましいと思った。食堂の椅子にかけて、ぼんやりと庭の池をながめていた。池の水はいつかの台風から藻をと

かしたような不透明になっていた。子供ができてしまえばおしまいだ、事態は一変する。その思いが私の胸につよかった。生まれてくるものに対して、無償の行為がはじまるのだ。男も女も自分らの問題だけではすましていられなくなる。私にも、妻以外の女に子供ができる機会が二度もあった。生まれない先に片付けられたので、仙哉のような事態にならなかった。もし生まれていたらどうなのか。私は仙哉をかりて、自分の思いを託しているのではない。仙哉が女の子を可愛がるのは、生まれたことが悲劇であるゆえに、いっそうふびんがかかるのではないか。

女中が手紙の束を食堂のテーブルにおいた。新聞や雑誌をつみかさねたあいだに、赤と青でふちをとった航空郵便がまじっていた。アメリカのどちらかの子からきたものである。手にとると、娘からのものだった。娘は目下妊娠中で、来年三月が出産予定になっている。手紙をよみはじめた私は、途中で息をとめた。そんな衝撃をうけた。娘夫婦と同居中の長男の直が、ドイツ娘と親しくなったというのである。すでに友情以上にすすんでいるらしい、いまの内に注意をあたえないと取りかえしのつかないことになる。直はリボン大学で一年を修学し、つぎの一年はカリフォルニアの大学にうつることになっていた。九月に学期がはじまるので、それまでニューヨークの姉のいるアパートで過ごしているのだった。ウイロウ・ストリートのアパートで

ある。一階にフランス男がひとりでくらしていた。姉夫婦のもとに同居している直に同情して、フランス人が自分といっしょにくらさないかと誘った。直はフランス人と同居することになった。フランス人は料理が上手だった。同居するに際して、私は危懼した。馬鹿馬鹿しいおそれだったが、私は本気であった。相手は四十すぎの独身者である。そのフランス人が直によからぬ感情を寄せているのではないか。軽井沢のある夏、盆踊りを見物にでかけた直が外人にいいよられて、気持を悪くしてかえってきたのを思い出す。外人のある種の男性からみると、私の子には、どこかそういう魅力があるのではないか。とんでもないことである。さっそくそのことを書いてやった。私は娘からも直からも笑われた。フランス人はそういういやらしい男ではないというのだ。妻は子の返事で安心をしたが、私はまだうたがいのをこした。同性愛の趣味は、露骨に顔や態度にあらわれているものではない。まわりが外人ばかりの生活では、直の感覚も麻痺しているのではないか。いずれにしても太平洋をへだてているのでは、私の不安はとどかない。そのフランス人のところに数人の女性が入入していた。その中のひとりのドイツの娘と直が親しくなったというのである。私はさっそく手紙を妻にみせたかった。が、妻は姉と話中である。子の性格がわかっていただけに、不安が頭をもたげるのを防ぎようがなかった。取越苦勞であればよ

いが、娘の心配が現実のものとなるのは時間の問題のような気がした。直には手かげんということができないのである。女の中にはあそぶ女と結婚する女の区別のあることが、わかつたはずもない。私はいらだった。直がすぐそこにいるかのように、じっとしていられなくなった。何かの用で妻が台所にはいつてきた。それをとらえて、「直がドイツの娘と恋愛をはじめたらしい。一本気な性格だけにあぶないと圭子から手紙がきた」

妻は顔いろも変えなかった。いきなり心にとどかない風であった。もしもこれがこのまま進展したならば、義弟の問題どころではないのだ。が、妻は仙哉の問題に心を占められていて、私の狼狽がよくわからなかったようである。

「あの子は、アメリカへ勉強にいったのですよ。そんな外国の娘と恋愛をするためではありません。何のためにお金をおくっているのですか」

長姉がかえり、私の報告をあらためてきくと、妻は顔いろを変えた。しかし、青天の霹靂^{へきれき}というのではなかった。

直は二十四歳である。アメリカに発つ前にそうした問題で私たちを心配させたことがある。いわば前科者である。私たちは未犯の犯行におびやかされたといってもよかった。

「青い目の妻といっしょに羽田にかえるといふことの絶対がないように……」

「そんな馬鹿なことはいけませんよ。そんなことを想像して